

土佐日記 門出

① 男もす男性 書く というなる日記といふものを、女女性 書く であるわたしもしてみむとて、するなり。思う

② それの年の十二月の二十日 余り一日の日の 戌午後八時頃 出発をの時に、門出したす。

③ そのよし、いささかにいきさつ を すこしばかりものに書きつく。書き付ける

④ ある人、が県の四年五年果てて、例のがことどもみなし終へて、も

解由状受け取つ 住んでいた官舎 出 解由など取りて、住む館より出でて、船に予定乗るべき所へわたる。移動した

⑤ かれこれ、知るあの人やこの人 知っている 人知らぬ、送りす。人 人が 見送り した

⑥ 年ごろ 長年の間 とてもよくくらべ 親しく交際してきた づる人々なむ、別れがたく思ひて、思つ

日 一日中しきりに、とかく なにやかやとしつづ、ながら 大声上げて騒ぎ立てるのしるうちに、夜更けぬ。が

⑦ 二十二日に、和泉の国までと、平らかに はせめて行こう 無事であるようにと願立つ。神仏に祈願する

⑧ 藤原のときざね、は船路 船旅 であるなれど、むまのはなむけ がす。馬のはなむけ を

⑨ 上・中・下、酔ひ飽きて、いと 身分の の者が 酔っぱらつてあやしく、潮海のほとりにて、とても 変なことだが からいで、

あざれ合へり。ふざけ合つ ている

⑩ 二十三日。八木のやすのりといふ人あり。

⑪ この人、国は 国司の役所で 命令して仕事をさせる人  
に必ずしも言ひ使ふ者  
にで も ない あらそうだ ざなり 。

⑫ これこの男 ぞ、たたはしきやうにて、むまのはなむけを したる。

⑬ 守柄国司の人柄 にやあらむ、国人の心の常として、「今はとなつて 用も無い いつ

顔を 見え見せない なるを、心ある者は、恥ずかし ながら ないで ずになむ来来た ける。詠嘆

⑭ これは、もの錢別の贈り物 によりてほむるにしもあらず。

⑮ 二十四日。講師国分寺の僧侶、むまのはなむけを しに出でませり。お出ましになつた

⑯ ありとある上・下、童まで酔ひしれて、一文字をだに知らぬ者、全ての 身分の の人や 子ども 酔っぱらつて という さえ ない が

手では書けないのに 千鳥足を 踏んで 遊び興じている  
しが足は十文字に踏みてぞ遊ぶ。